

アスファルトの街で育ったって土に還るように  
影が濃くなると海を見たいと思うように

それは、何も求めず、知られないこと

本当は、花を買う人は花瓶を、食事をする人は食器を愛していた  
花はどれだけ愛でもわたしにならずに壊れていつて

食事は白歯で壊すたびにわたしになっていつた

割れた電球で食卓を灯す

祝福のためのケーキがそつと佇んでいる

溶けた生クリームが手について、甘ったるいべたつきが取れなくなる  
蠟燭を吹き消すと、ケーキは壊れて祝福はわたしになっていく

一つ種明かしをすると、そのケーキは今日になって焦って探してやっと見つ  
けたこと

平熱三十六度八分の日、

彼女が魔法を使って、誰かが笑う

雪の下から覗く花に似た、小さな約束を抱いて、いて

（永方佑樹「祝奏の現在形」に寄せて）